MUSASHINO for TOMORROW Vol.103

巻　頭
ずっと遊びつづけていく覚悟
加藤健一

卒業生インタビュー
武蔵野時代があるから、今の私がある
山下晶子

海外音楽事情
リヒターの一言でチェンバロ奏者に
ヘトヴィヒ・ビルグラム

表紙：イリヤ・イーティン（ピアノ）

October 2012
vol.103

ずっと
遊びつづけていく覚悟

加藤健一

俳優・演出家・プロデューサー

20代では、つかこうへい芝居の看板役者として一世を風靡。30歳を迎えて、モノローグ芝居「審判」上演のために事務所を設立。以後、現在に至るまで東京下北沢の本多劇場をベースに年3、4本の上質な翻訳劇を世に送りつづけている加藤健一さん。主役を務め、そのうえ全公演を自らプロデュースするなど、その活動は常に演劇界の注目を集めています。2003年初演の「詩人の恋」を始めとする音楽劇では見事な歌声も披露しており、美声とテクニックはプロもうなるほど。武蔵野音楽大学 江古田キャンパスのすぐそばにある、稽古場を兼ねた事務所にお邪魔してお話を伺いました。（※この原稿はインタビューを元に構成したものであり、文責は編集部にあります）

加藤健一 *Kenichi Kato*

1949年、静岡県磐田市生まれ。'68年、劇団俳優小劇場養成所に入所。'70年に養成所を卒業し、以後、つかこうへい事務所の作品に多数客演。'80年、「審判」上演のため加藤健一事務所を設立。以後、「第二章」「マイ・ファット・フレンド」「セイムタイム・ネクストイヤー」「すべて世は事も無し」「木の皿」「詩人の恋」などの翻訳劇を次々と発表。
'91年、江古田スタジオを開設。'07年、紫綬褒章受章。'11年、加藤健一プロデュース100本記念公演「滝沢家の内乱」を上演。紀伊國屋演劇賞個人賞（'82年）、文化庁芸術選奨文部大臣新人賞（'89年）、読売演劇大賞優秀作品賞・優秀演出家賞（'02年）、朝日舞台芸術賞、読売演劇大賞優秀男優賞（'04年）など受賞歴多数。

俳優業のスタート

加藤さんと芝居との出会いは高校2年生、できたばかりの演劇部に参加したときから。当時はそれほど演劇に対して思い入れもなく、高校卒業後は建設会社に事務員として就職。働き始めたものの、将来に対して確信が持てず僅か半年で退社。改めて自分は何をしたいのかと問い直し、俳優小劇場養成所を受験して合格。ここから本格的な俳優修業が始まります。

「養成所に入って初めて、演劇の神様のようなものに向かって芝居をしていくという姿勢を教わりました。それまでは演劇がどんなものかも分からず、早くテレビに出たい、石原裕次郎さんみたいになりたい、なんていう浮ついた気持ちでしたが、演劇の神聖さに触れるなかで徐々に演技することにのめり込んで行きました。2年で養成所が閉鎖されたため、仲間3人で新たに劇団『新芸』を立ち上げて、『熱海殺人事件』を始めとするつかこうへいさんの戯曲を上演。それが縁で、つかさん自身が演出する舞台に客演することとなりました」

演出家つかこうへいの斬新な演劇は当時の若者を魅了し、風間杜夫、平田満、そして加藤さんたちが主役を張る舞台は、通路にも人が溢れるほど常に超満員。こうして熱く20代を走り抜けた加藤さんは、30歳になり新たな決断をします。2時間半をたった一人で演じきる、伝説のモノローグ芝居「審判」への挑戦です。

「つかさんの芝居に台本はありません。『口立て』と呼ばれる演出法で、つかさん自身が台詞を口にし、役者はそれをオウム返しにして覚えてい

▲ 舞台『レンド・ミー・ア・テナー』より／加藤さんと大島宇三郎さん（右）　撮影：石川 純

きます。我々は自分で感情を作ることもなく、マリオネットのように真似をすればいいだけです。それを何年も続けているうちに、台本の活字から感情を読み込んでそれを役に反映させていくという、本来の作業を忘れてしまうのではないかという怖さを感じるようになりました。ですから役者の基本に立ち返るという意味もあり、個人事務所をつくり『審判』を演じたわけです」

とを、今は私ひとりでやるというだけ。当たり前にやっていますが、敢えて言えば台本選びが一番大変ですね。ひたすら読み続けて、その中から1本決めるという感じ。不思議なもので100冊くらい読んでいると、1本くらい演じたくなる本に出会えるものです。基準は、単純に自分が感動できるかどうか。喜劇ばかりやっていると喜劇に鈍感になってシリアスドラマに感動するようになったり、その逆だったり、自分の体がリトマス試験紙になって作品選びの基準になっているようです」

こうして加藤さんを感動させ上演にいたった作品群の中に、コミカルにテナー歌手を演じる「レンド・ミー・ア・テナー」、声楽教師としてシューマンの歌曲を披露する「詩人の恋」、リヒャルト・シュトラウス役でピアノを弾くシーンもある「コラボレーション」等の音楽劇があります。これら作品の役作りのため、本格的に歌やピアノのレッスンを受けたといいます。

「劇中で普通の人が歌う歌入り芝居なら、どのように歌っても成立しますが、クラシックの音楽家とかオペラ歌手などの役はそうは行きません。どうやっても難しいですね。2003年に初演した『詩人の恋』は台本が素晴らしくてつい選んでしまったのですが、生徒役の畠中洋さんはミュー

主役兼プロデューサー

加藤さんが設立した加藤健一事務所は、劇団員は加藤さんのみ。作品選びからキャスティング、演出・美術・衣裳などのスタッフ集め、そのすべてを加藤さん自身が行うという独特のスタイルをとっています。ひとりで主役とプロデューサーの両方をこなしながら、初演、再演を合わせ年に3、4本の芝居をコンスタントに提供しつづけています。

「このスタイルは『新芸』の頃から同じです。前は3人でやっていたこ

▲ 舞台『詩人の恋』より／加藤さんと畠中 洋さん（左）　撮影：石川 純

ジカル出身の方で、私が演じる声楽教師より生徒の方が歌が上手いというおかしなものになってしまいました。そのとき以来10年間ずっと声楽のレッスンをつづけ、舞台も何度か再演しています。レッスンを重ねるうちに、楽譜が怖くなくなりました。以前は♯や♭が増えて行くごとに怖くなるという、楽譜恐怖症みたいなものがあったんですが、それがなくなりましたね（笑）」

控えめに話す加藤さんですが、音楽評論家であり東京藝術大学名誉教授でもあった故･畑中良輔さんは､「加藤健一の歌が本格的で驚いた」と賞賛を送っています。

舞台の面白さ

俳優業を始めて40年以上たった今も、精力的に演じつづけている加藤さん。演劇のどのような部分に一番惹かれているのでしょうか。

「作家や作品によって新しい自分を見つけられたり、新しい自分が掘り起こされたり、そういう瞬間が気持ちいいのでしょうね。ただ、そうしたことは別にして、常に楽しいですよ。役者も音楽家も、基本的に仕事意識と遊び意識が混在している職業です。一日じゅうピアノを弾いていたり、カツラをかぶって走り回ったり、子供から見ればそれは遊びでしょう。アマチュアの遊びじゃ飽き足らない、悪い意味じゃなく毎日遊んで生きていこうと決めた人がなる職業。誰かに頼まれてやっているわけじゃないし、自分が楽しくてやっているんだから、辛いことはほとんどないですね。もちろん体力的にキツイとか、声が出なくて困ったりすることはありますが」

演劇が映画やテレビドラマと違うのは、演じる側と見る側が同じ時間と空間を共有しているライブ感。それは音楽の演奏会も同じです。観客の反応によって舞台はどう変わるものなのか、また演劇における観客の存在を加藤さんはどうお考えになっているのでしょうか。

「クラシックは少し違うかもしれませんが、ロックやポップスのコンサートと同じように、舞台もお客さんのノリによって変わるということはありますね。それに芝居というものは、稽古場で完成させて、それを見せているのではありません。お客さんのいない稽古場では、あくまでお客さんを想定して作っているだけ。芝居は、劇場で、役者とお客さんとで完成させるものです。だから、ここで笑うと想定していても笑ってもらえなければ、芝居を変えることもあります。稽古場で芝居を完成させることは出来ないわけです」

江古田への想い

西武池袋線江古田駅から武蔵野音楽大学江古田キャンパスに到る道の途中、むき出しの鉄骨とガラス張りの斬新なデザインのビルが加藤さんの事務所（スタジオ）です。ビルが建ってから約20年。駅前の浅間神社がお気に入りのスポットだという加藤さんは、この地にひときわ愛着をお持ちのよう。

「演劇の稽古場というのは、街から嫌われることが多かったんです。出入りする人がジャージ姿で汚いとか、何となく怖そうだとか（笑）。それに色々な音を出すでしょう、楽器の演奏のように美しい音ではなく。それで敬遠されがちなんです。あちこち候補地を探したんですが、江古田には武蔵野音大があったり、演劇学科を持つ日大芸術学部があったりして、街の人たちがそうした若者の文化とか芸術的なものに対して理解があるのではない

▲ 舞台『コラボレーション』より／加藤さんと福井貴一さん（左）　撮影：石川 純

▲ 加藤さんの事務所（スタジオ）

かということで江古田にビルを建てることに決めました。江古田の街自体も好きですね。私は古いものが好きですから、駅前に浅間神社があって、そこにはバスが入れないとか、昔ながらの市場があるとか、そういった開発されていない感じの街の雰囲気が気に入っています。今の状態のまま、ずっと残して欲しいものです」

2008年に「詩人の恋」を再演した際、加藤さんはそのパンフレットに載せる写真の撮影のために共演の畠中洋さんともども当学園の楽器博物館に来館されました。世界中の珍しい楽器、古い楽器に興味を持たれ、中でも縦型のグランドピアノや芝居にちなんだクララ・シューマンのピアノにはいたく感動したそうです。

芸術を志す若者へ

舞台でも、演奏会でも、お客さんを前に本番を迎えるときには緊張がつきもの。ベテランの加藤さんであっても、やはり緊張するといいます。

「緊張しないためには納得行くまで、とことん練習するしかないでしょう。役者なら役を信じられるまで、役に成りきったような気になれるまで。ただ、誰でも、いくつになっても緊張はするもの。私と同世代の役者さんでも、本番前に手の平に『人、人、人』と書いて何度も舐めたり、舞台の袖で仰向けに寝て集中したり、普通にしています。みんなが緊張していると思えば、少しはラクになれるでしょう。それに、意外とお客さんも緊張するんですよ。役者の緊張が取れるとお客さんの緊張もほどけて、そこでやっとイイ関係が生まれるように思います」

演劇も音楽も遊びごとだとおっしゃる加藤さん。もちろん、だからいい加減に向き合うのではなく、自分が選んだ神聖な遊びと真正面から対峙すべきだという意味で。

「絵画と演劇と音楽、この3つは人間の本能に組み込まれているものです。誰に教えられるでもなく、小さな子供は地面に絵を描き、親や兄弟を真似る演技をし、音楽のようなものを口ずさみます。最初から持っているものと、最終的に音楽の女神や演劇の女神に向かうことには、きっと関係があります。それさえ忘れずにいれば、あとは何でもありだと思います。向く方向をしっかり見定めて、その上で遊んで生きて行けばいいんじゃないでしょうか」

最後に、芸術の道、音楽の道を志す若者へのメッセージをいただきました。

「私たちには常に欲があります。有名になりたいという『名声欲』、お金持ちになりたいという『金銭欲』、そして芸術の女神に愛されたいという『芸術欲』。この全てを望みます。名声欲が満たされると、一緒にお金も入ってきます。そのときに芸術欲が少なくなってしまいがちです。それでは何のためにやっているのか分かりません。音楽で遊んで行くと決めた以上は、ずっと真剣に音楽と向き合って遊び抜いてください。私はよくこんな例えをします。8,000mの山に登れる人は、山登りが楽しいはずです。普通の人は苦しいから登れないだけ。苦しい人は登らなくてもいいんです。楽しい人だけが登ればいい。音楽も演劇も、同じように楽しいと思う人だけがやればいい仕事なんです。芸術を目指すなら、8,000mの高みでも楽しめる、そうした場所でも遊べる人になって欲しいと思います」

加藤健一事務所 次回公演

『バカのカベ ～フランス風～』

11月15日㈭～12月2日㈰ 本多劇場（下北沢）

作：フランシス・フェベール　訳・演出：鵜山 仁
出演：加藤健一、風間杜夫、他

前売券好評発売中！

つかこうへい事務所の解散以来、加藤さんと風間杜夫さんが30年ぶりに共演。さらに平田満さんも声のみで出演されます。

※お問合せ：加藤健一事務所　TEL.03-3557-0789
ホームページ：http://homepage2.nifty.com/katoken/

卒業生インタビュー

武蔵野時代があるから、今の私がある

● 山下晶子（ベルリン芸術大学専任講師）●

小学校2年から大学院を卒業するまでずっと武蔵野に通いつづけた山下晶子さん。ドイツ留学後、ピアニスト・鍵盤楽器奏者としてヨーロッパ各国で数多くの演奏会に出演。1993年に自らが留学したベルリン芸術大学音楽学部の専任講師に就任され、現在もコレペティートアとして学生の指導にあたっています。一時帰国中のお忙しいなか、久しぶりに訪れたという江古田キャンパスの一室にてお話を伺いました。（2012年7月30日インタビュー、文責編集部）

山下晶子 *Akiko Yamashita*

東京都出身。祖父の故・山下孝は作曲家、指揮者。1966年より武蔵野音楽大学附属音楽教室に入室し、船橋毬子氏、ヤン・ホラーク氏に師事。東京都立立川高等学校卒業後、'77年に武蔵野音楽大学入学、栗田和雄氏に師事。'79年より同大学大学院修了まで再びホラーク氏に師事。'83年秋よりベルリン芸術大学に留学。ピアノをゲオルク・サヴァ氏に、ソロと室内楽をジョルジュ・シェボック氏に、歌曲伴奏法をアリベルト・ライマン氏に師事。ディプロム並びに国家演奏家試験を最優秀の成績で卒業。ソリストとして数多くのオーケストラと共演したほか、ヨーロッパ各国、アメリカにて多彩な演奏会に出演。鍵盤楽器奏者としてベルリンフィル、ドイツ交響楽団等の演奏会にも出演している。'93年よりベルリン芸術大学専任講師。'09年よりドイツ青少年音楽コンクール審査員。'12年7月、ドイチラントラジオとの共同制作によるCD「TEMPORAL VARIATIONS」をリリース。

── 久しぶりの江古田はいかがですか？

山下　何年ぶりでしょうか。本当に懐かしいですね。以前と何も変わっていなくて、まるでタイムスリップしたみたい（笑）。でも、じきに建て替えてしまうとか。寂しいですね。

── 最初に、現在お勤めのベルリン芸術大学についてお聞かせください。かつて本学園の福井直敬理事長も学び、著名な音楽家を多く輩出している名門ですね。

山下　19世紀に音楽学校としてスタートし、1975年に美術大学と合併。現在では音楽学部のほか、美術学部、舞台芸術学部、建築・メディア・デザイン学部の4学部を擁して、総合芸術大学としては世界有数の規模を誇っています。ベルリンの壁が開く前は東ヨーロッパから、最近では西ヨーロッパからの留学生が多く、先生方も国際色に富んでいます。レベルもかなり高く、音楽学部に関して言えば、どの楽器も10倍以上の難関です。

▲ 大学のエントランス

── 現在のお仕事に就くに至った経緯とお仕事の内容は？

山下　留学して2年半がたった頃に父親が急死し、帰国するかどうか悩んだのですが、母にわがままを聞いてもらいドイツにとどまりました。職を探しながら大学生という身分で8年ほど経った頃、ピアノを師事したゲオルク・サヴァ先生のご尽力と、たまたま席が空いたという運もあって現職を得ることができました。終身雇用が約束された、年金付きの公務員という非常に恵まれたポジションです。現在は教授と学生の間に立ち、時にアシスタントとして、時に指導者として働いており、具体的には

▲ ベルリン芸術大学

▲ 指導中の山下さん

オーケストラの団員を養成する学科でコレペティートアとしてヴァイオリンとヴィオラの学生を指導しています。入団試験に合格させることが私たちの仕事の8割方を占めると言ってもいいでしょう。養成学科に近い感覚ですね。伴奏者として多くのレパートリーを覚えなくてはなりませんし、学校主催の各種コンサートでの演奏、コンクールや入団試験の準備、入学・卒業試験等の受け持ちなど、非常に忙しく仕事内容は多岐にわたっています。

── ベルリンの学生たちについて聞かせてください。

山下　大学に入る時点で、音楽を職業にするという意識がとても高いように思います。将来はこういう楽団に入り、こういう生活をする、といった明確なビジョン、明確な目標を持っています。東西ドイツが統一されてから、小さな劇場なども減り、勉強さえしておけば将来は何とかなる、という状況ではなくなってしまったことも背景にあるのかもしれません。

▲ ヨーゼフ・ヨアヒム ホール

── 話は変わりますが、今年の11月に東日本大震災の被災地で演奏会を行うそうですね。

山下　福島県相馬郡新地町と相馬市の計4つの小・中・高等学校で、鑑賞教室を開いたり、子供たちと一緒に歌ったり、吹奏楽部の指導にあたるという企画です。来て励まして欲しいと知人から打診され、ドイツ人のホルン奏者、大学の同僚のオペラ歌手の方と参加させていただくことにしました。ベルリンは被災地支援の意識が強く、福島の子供たちに、応援している人が世界中にいることを伝えたいということが一番の目的です。その一環として、東京あたりでチャリティコンサートなどが開けると良いと思っているのですが…。

── 山下さんと武蔵野の関係は附属の音楽教室時代からということですが。

山下　小学校2年生のとき、母親が音楽教室のチラシを見たのがきっかけで弟と一緒に通い始めました。それから大学院を修了するまで武蔵野にはお世話になりました。今でも江古田の夢をしょっちゅう見ますよ（笑）。

── 武蔵野で一番思い出すことは何でしょう？

山下　音楽教室に通っていた中学1年のときにヤン・ホラーク先生が来日され、じかに西洋の音楽にふれたことが、今に至るまで私の人生において一番大きな出来事です。多感な時期に、武蔵野で素晴らしい先生とお会いして影響を受けたことは感謝するばかりです。小学生の頃からベートーヴェンホールでケンプを始め錚々たる音楽家の演奏会を聴いたことも良い経験。充実の設備、盛んな国際交流、積極的な子供への教育、こうした恵まれた環境の中で学べたことがいかに有り難いことだったか、今になってひしひしと感じています。

もう一つ忘れてならないのは、大学4年のときのピュイグ＝ロジェ先生との出会い。ソルフェージュの授業を受けたのですが、当時は良く分からなかったことが、今の仕事をするようになって初めて理解できるようになりました。ロジェ先生は、今の私のお手本であり理想です。武蔵野時代があるから今のポジションにいる、それは必然のような気がしています。

── 最後に武蔵野の後輩たちへのメッセージをお願いします。

山下　数多くの学生と接してきた中で強調したいのは、好奇心の大切さ。好奇心の強い人ほどチャンスを掴んでいるようです。ピアノに限らず、どんな道に進むにしても、コレが面白いんだ、コレが知りたいんだという好奇心、探求心、興味を持ちつづけることが大事だと思います。高齢になっても活躍されている方は、皆さん旺盛な好奇心をお持ちです。あらゆるものに対して最初から目を閉じないで、と言いたいですね。

7月に発売されたCD
「TEMPORAL VARIATIONS」
ビルギット・シュミーダー（Ob.）＆山下晶子（Pf.）

海・外・音・楽・事・情

リヒターの一言でチェンバロ奏者に

●ヘトヴィヒ・ビルグラム女史（オルガン・チェンバロ）●

オルガン、チェンバロ奏者として、カール・リヒターやモーリス・アンドレらと数多く共演したビルグラム女史。本年5月、武蔵野音楽大学の客員教授として招かれ、オルガン・リサイタル、チェンバロ公開講座（テーマ：J.S.バッハ「イギリス組曲第3番」）、さらに本学客員教授クルト・グントナー氏とJ.S.バッハのヴァイオリンソナタ全曲演奏会を開催しました。リニューアルされた本学ベートーヴェンホールのオルガンを駆使してバロック作品等を演奏、色とりどりの豊かな音色の変化を聴かせてくれました。

ヘトヴィヒ・ビルグラム
Hedwig Bilgram

ミュンヘン音楽大学卒業。K.リヒターに学んだ。1959年ミュンヘンの国際ARD音楽コンクールのオルガン部門第1位。長年、リヒターの指揮のもとミュンヘン・バッハ合唱団、管弦楽団で宗教曲の演奏・録音を、またリヒターによるバッハのチェンバロ協奏曲全集の録音でチェンバロを担当した他、トランペットのM.アンドレとも多数共演。'98年までミュンヘン音楽大学でオルガンとチェンバロの教鞭を執る。ソリスト、室内楽奏者として世界各国で活発な演奏活動を行っている。

世界各地で活発な演奏活動を行う傍ら、ミュンヘン音楽大学でも教鞭を執られていた先生に、ご自身の音楽人生、師や共演者、母国ドイツの音楽事情などをお話しいただきました。（2012年5月22日インタビュー）

オルガンに育まれて

── 先日は、素晴らしいオルガン・リサイタルを聴かせていただき、ありがとうございました。最初に、なぜオルガンに興味を持たれたのかお聞かせください。

ビルグラム　私はバイエルンの小さな町、メミンゲンで生まれました。2人の叔父はオルガン・ビルダー（オルガン制作家）で、そのうちの一人は有名なパウル・オット（1903-1991）です[1]。そうした理由で、子供の頃からオルガンに興味を持ち、まずピアノのレッスンを受けました。小さな頃からピアノを師事したティルデ・クラウスハール先生は、アウグスト・シュミット＝リントナーの高弟の一人。シュミット＝リントナーは、ヨーゼフ・ラインベルガー（1839-1901）の薫陶を受けて音楽の道に進み、マックス・レーガー（1873-1916）の親しい友人でもありました[2]。私の自宅には、シュミット＝リントナーの遺品のピアノがあります。ミュンヘン音楽大学に進んでからは、ピアノをフリードリヒ・ヴューラーに、オルガンをカール・リヒター（1926-1981）に師事しました。

▲ オルガン・リサイタル（2012年5月21日）

── リヒターは、どんな先生でしたか。

ビルグラム　非常に厳しかったですね。また自身の演奏活動が忙しかったので、休講がたびたびでした。

── チェンバロを演奏するに至った経緯は。

ビルグラム　リヒターによって、と言えるでしょう。ミュンヘン・バッハ管弦楽団には通奏低音を演奏するチェンバロ奏者が必要でした。そこで、1時間ほどJ.S.バッハの《パルティータ》でチェンバロのレッスンを受けると、リヒターから「もう十分」と言われ、そのまま学生ながら管弦楽団で演奏することになったのです。バッハ合唱団やバッハ管弦楽団で、コレペティトールの機会に恵まれたことも幸せでした。受難曲などの大作から、多くを学ぶことができましたから。

── 学生時代からそのような演奏活動をしながら、コンクールで優勝もなさっています。

ビルグラム　1956年にドイツの音楽大学のコンクールのオルガン部門で

第1位、1959年にはミュンヘンでドイツ連邦共和国公共ラジオ放送局連合体(ARD)主催のもと行われた国際音楽コンクールのオルガン部門で第1位になりました。その後は、コンクールよりも実際の演奏活動に重点を置きました。

著名な音楽家との演奏活動

── 今までに大勢の著名な音楽家と室内楽の演奏活動をなさっていますね。

ビルグラム　日本に縁の深い音楽家としては、フルート奏者のパウル・マイゼン、オーボエ奏者のハンスイェルク・シェレンベルガーがいます。ファゴット奏者のクラウス・トゥーネマン、オーボエ奏者のインゴ・ゴリツキーとも室内楽を演奏しています。今名前を挙げたベルリン・フィルのソロ・オーボエ奏者のシェレンベルガーが1990年に設立したハイドン・アンサンブル・ベルリンでは、10年にわたって通奏低音を演奏しました。

── 先頃亡くなられたトランペット奏者のモーリス・アンドレ(1933-2012)とは、35年にわたって演奏活動を共にされました。アンドレさんの思い出をお聞かせください。

ビルグラム　アンドレは、逸話、エピソードといったものに事欠かない人。ユーモアもたっぷりで、音楽とエネルギーに溢れていました。最初に共演したのは、1968年5月18日のことでした。当時は世界各地で学生運動が活発で、フランスは5月に全土でゼネストに突入しました(五月危機)。そんなわけで、フランスからミュンヘンへ飛行機は飛ばず、汽車も動かず、結局、アンドレは自分で自動車を運転して何とかミュンヘンにやって来ました。でも、到着後は食事と睡眠が優先というわけで、リハーサルが出来たのはようやく夕方の6時でした。

私たちはそれまで一度も共演したことがなく、晩の8時にはコンサートが始まることになっていたというのに…。ミュンヘンの大学教会、ルートヴィヒ教会は2,000人の聴衆で超満員でした。座れる所にはどこでも腰を下ろすといった具合で、教会がこれほど満員になることは初めてでした。演奏会は大成功を収めました。

── アンドレとはどのような曲目を演奏なさいましたか。

ビルグラム　たいていは、古い時代の作曲家の作品です。オリジナルの曲はそんなに多くありませんから、バロック時代のソナタをオルガンとトランペット用にたくさん編曲しました。これらは私たち二人だけのための手書きの楽譜ですので、出版といったことは考えませんでした。

── 著名な指揮者との共演について、お話しください。

ビルグラム　ヘルベルト・フォン・カラヤン(1908-1989)とは、ニューヨークでJ.S.バッハの《ブランデンブルク協奏曲》全6曲を演奏しました。私はそこで、この協奏曲第2番のソリストとしてやって来たアンドレと知り合ったのです。レナード・バーンスタイン(1918-1990)の下では、何度かJ.ハイドンの《天地創造》の通奏低音を演奏しました。個人的にも親しい友人であったオイゲン・ヨッフム(1902-1987)とも、《天地創造》で共演しています。ルドルフ・ケンペ(1910-1976)指揮のミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団では、オルガン協奏曲を演奏しました。

── 海外への演奏活動も活発になさいました。

ビルグラム　アメリカとロシアへは、ソロ・オルガニストとしての演奏旅行です。カナダには、モーリス・アンドレと行きました。日本へはカール・リヒター指揮、ミュンヘン・バッハ合唱団と管弦楽団と共に1969年に初めて来ました。その後、15年、20年ほどして、再びアンドレと来日しています。

▲「バッハの夕べ」～ヘトヴィヒ・ビルグラム(Cem.) & クルト・グントナー(Vln.) デュオ・リサイタル～(2012年5月31日)

他の芸術に関心を持つ

── 最近のドイツの音楽事情についてのご意見をお聞かせください。

ビルグラム　クラシックの音楽会の聴衆は、老齢化しました。私が一番気に入らないのは、クラシック音楽のイベント化です。つまり、有名な音楽家が来るとテレビ等でも盛んに

取り上げて大騒ぎし、その音楽会には人が集まるけれど、音楽に真摯に耳を傾けるという態度が見られない、ということです。真に室内楽を楽しむ人は減り、聴衆はまだいるけれども、多くが中年以上の人たちです。

── 音楽を学ぶ学生へのアドバイスをお願いします。

ビルグラム　もちろん、何より練習すること、数多く聴くことは重要です。しかし、単に指を動かすことだけに集中するのではなく、他の芸術の表現方法を知ることも大切です。美術館やギャラリーに積極的に足を運び、造形芸術にも目を開きましょう。私はミュンヘン音楽大学で教えていた頃、ミュンヘンの美術館アルテ・ピナコテークに門下の学生を連れて行き、各時代の重要な絵画の解説をしたものです。

── 初めて武蔵野においでになって、どのような印象を受けられましたか？

ビルグラム　お会いした方々は皆さんとても親切で、心からの対応をしてくださいました。非常に雰囲気が良く、居心地の良い大学だと思います。

── 本日は、貴重なお話をありがとうございました。

（インタビュー・通訳：寺本まり子）

▲ 本学ベートーヴェンホールのオルガンの前で

1) Paul Ott は、20世紀のオルガン運動において重要なドイツのオルガン制作家。1938年にはフーゴー・ディストラーの自宅のオルガンを制作した。北ドイツの歴史的オルガンの修復にも携わり、オットの工房は1960-70年代に最盛期を迎えた。オットはドイツばかりではなく、アメリカやイスラエルでもオルガンを制作している。

2) August Schmidt-Lindner（1870-1959）。しばしばマックス・レーガーと共に仕事をして、J.S.バッハのピアノ曲の校訂楽譜を編纂した。

音楽の万華鏡 21

ドイツのマティス：イーゼンハイムの祭壇画

2013年に没後50年を迎えるパウル・ヒンデミット（1895-1963）の代表作《画家マティス》は、ドイツ・ルネサンス期の画家マティアス・グリューネバルト（1470/75頃-1528）をモデルとしている。宗教改革の波に翻弄されたこの画家の存在は早くに忘れられたが、20世紀初頭になって強烈な表現性が高く評価され、初めて本名（マティス・ナイトハルト・ゴートハルト）も知られるようになった。ヒンデミットのオペラでは、第6場でこの祭壇画が幻影として現れる。

この観音開きの祭壇画は、アルザス地方イーゼンハイムの修道院病院のために1512-15年頃制作された。祭壇の開け方で画面は3段階に分かれるが、この「天使の奏楽と後光の聖母」（第2図中央）では、マリア賛美とキリスト降誕が主なテーマである。画面左のゴシック風礼拝堂には奏楽の天使が集まり、3人が楽器を手にしている。淡紅色の衣をまとった天使は階段の前でヴィオラ・ダ・ガンバを演奏、この崇高な音がこの画面全体を満たしている。しかしこの天使の弓の持ち方が逆であることには、悪魔の世界との関連も指摘されている。この天使の右後ろでは、別の天使がヴィオラ・ダ・ブラッチョ、さらに柱の横では鳥の羽で覆われた天使がガンバを演奏している。礼拝堂の入り口では、後光に包まれ、冠をかぶり、祈りを捧げる女性が見られる。この女性は、階段上のガラスの壺から、受胎を告知されたマリアと考えられ、さらに階段下の樽と手拭はキリストの産湯を示している。

この祭壇画の右半分の中心は、幼子を慈しみ深く抱くマリアである。天からは神の光がマリアに降り注ぎ、2人の天使が羊飼いたちに救い主の御降誕を告げている。聖母の座る、乙女マリアの純潔を表す壁で囲われた庭では、2種の植物も象徴的意味を持つ。聖母の右側の赤いバラはキリストの受難（第1図）を暗示し、左側のイチジクの木は知恵の木として第3図と関連する。没後50年を機に、オペラを含むこの作曲家の全体像が見直され、演奏と研究が活発に行われることを願いたい。

寺本まり子（本学音楽学教授）

九州で、東京で、ウィンドアンサンブル演奏会

武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル2012年前期公演が、指揮者に米国セントクラウド州立大学教授・バンドディレクター、また音楽学者としても国際的に評価を得ているリチャード・K.ハンセン氏を迎え、7月7日熊本県立劇場コンサートホール、7月8日長崎ブリックホール大ホール、7月13日東京オペラシティコンサートホールで開催されました。

本学のウィンドアンサンブルは昭和28(1953)年に発足以来、吹奏楽のオリジナル作品を中心に演奏するのが伝統で、これまで数多くの日本また世界初演の楽曲も発表してきました。現在、メンバーは大学3、4年の選抜者で構成され、指揮者には吹奏楽の本場アメリカで活躍する著名な指導者を招聘しています。

プログラム は、J. フリアーの“リオズ・コンバージェンス”(日本初演)でにぎやかに幕を開け、2012年度全日本吹奏楽コンクール課題曲、P.A.グレインジャー“愛の力”、“スプーン・リヴァー”、C.サン=サーンス“歌劇「サムソンとデリラ」よりダンス・バッカナール”など全9曲。ハンセン教授の指導のもとに磨きあげた華やかなアンサンブルを存分に披露しました。学生たちが積み重ねた努力の成果に、立ち見が出るほどの盛況となった九州公演をはじめ、各会場では盛大な拍手が送られました。

大成功に終わったウィンドアンサンブルの公演に続き、9月には本学管弦楽団が国内公演、さらにはドイツ演奏旅行に臨みました。詳細は次号でご紹介します。

▲ウィンドアンサンブル演奏会(東京オペラシティ コンサートホール)

第17回 インターナショナル・サマースクール・イン・トウキョウ開催

昨年、大震災の影響による諸般の事情により中止となった武蔵野音楽大学インターナショナル・サマースクール・イン・トウキョウが、2年ぶりに第17回を迎えて開催されました。本年はピアノの講師にすでにお馴染みとなったアルヌルフ・フォン・アルニム(ドイツ)、アレクサンダー・セメツキー(ロシア)❶に加え、新たにレフ・ナトチェニー(ロシア)、ホルヘ・ルイス・プラッツ(キューバ)が加わり、ヴァイオリンにウルフ・ヘルシャー(ドイツ)、フルートにミヒャエル・ファウスト(ドイツ)❷の諸氏、声楽にシルヴィア・シャシュ(ハンガリー)と初招聘のマルゲリータ・グリエルミ(イタリア)❸両女史という豪華な顔ぶれで、多くの参加者が熱心な密度の濃いレッスンを受講しました。

期間中にはプラッツ氏のリサイタ

❶

❷

ルが開催され、ショパンとスクリャービンのそれぞれ24の前奏曲やストラヴィンスキーの作品などを驚異的なテクニックと音楽性で披露❹。またナトチェニー氏により「ベートーヴェン ピアノ・ソナタの発展」－1790年代から1820年代の30年間にわたる進化の全容－と題したピアノセミナーが行われ、氏の適切な実演を交えた興味深いレクチャーとなりました❺。

最終日の選抜受講生によるコンサートでは10日間の成果が披露され、実り多かった本年度のスクールも無事成功のうちに終了しました。

熟練の音色を堪能した公開講座シリーズ

〔室内楽の夕べ〕

去る6月21日、還暦を迎えたカールマン・ベルケシュ本学客員教授(クラリネット)を中心に、江古田キャンパス ベートーヴェンホールで「室内楽の夕べ」が開催されました。〔共演＝ヴァイオリン：深山尚久／ヴィオラ：シャンドール・ナジ／チェロ：クレメンス・ドル／ピアノ：ドル恵理子〕❶

プログラム前半は、モーツァルト：ピアノ、クラリネットとヴィオラのための三重奏曲≪ケーゲルシュタット≫、クラリネットとヴィオラの柔らかい音色がマッチして美しい旋律を奏でました。続くベートーヴェン：ピアノ、クラリネット、チェロのための三重奏曲≪街の歌≫では、ベートーヴェン初期の溌剌とした楽曲を、躍動感溢れる活き活きとした演奏を披露。後半のブラームス：ピアノ、クラリネット、チェロのための三重奏曲では、重厚な響きを表現し、それぞれ異なるトリオの魅力を堪能しました。プログラム最後は、一転してバルトーク≪コントラスツ≫を熱演。ベルケシュ氏は、ナクソスレーベルで録音した“バルトーク・コントラスツ”でグラミー賞のゴールドメダルを授与されていますが、ハンガリーの独特な民族音楽の調性とリズムを、息のあった絶妙なアンサンブルで聴衆を大いに湧かせました。

〔室内管弦楽団定期演奏会〕

定例の室内管弦楽団(指揮：クルト・グントナー本学客員教授)演奏会が6月29日、江古田キャンパス ベートーヴェンホールにおいて開催されました❷❸。

プロコフィエフの「古典的交響曲」、モーツァルトのフルートとハープのための協奏曲(フルート独奏：斉藤由希、ハープ独奏：三浦麻葉)、ハイドンの交響曲第102番と親しみ深いプログラムに、多くの聴衆は楽しい一夕を過ごしました。

着任外国人教授紹介（平成24年度後期）

アルヌルフ・フォン・アルニム *Arnulf von Arnim*（ピアノ／ドイツ）

フランクフルト音楽大学に学び、パリにてP.サンカンに師事。マリア・カナルス及びヴィオッティ両国際コンクール第1位、ブゾーニ国際コンクール第3位。国際シューベルトコンクール音楽監督をはじめ、数々の国際コンクールにて審査員を務める。TV出演、レコーディングも数多く、近年ではシューマンの未公開の「2台ピアノのための作品」「4手のためのピアノ作品」を初収録した。ヨーロッパ、アメリカ、ロシアなど各地で演奏活動及び講習会を行う。現在、エッセン・フォルクヴァング音楽大学教授。

インゴ・ゴリツキー *Ingo Goritzki*（オーボエ／ドイツ）

デトモルトでヘルムート・ヴィンシャーマンに師事した。1964年ドイツ音楽大学コンクールでオーボエ部門第一位、プラハとジュネーヴの国際音楽コンクールにも入賞。'66年からバーゼル交響楽団、フランクフルト放送交響楽団の首席奏者を務めたほか、'72年以降はハノーファー音楽大学とシュトゥットガルト音楽大学で教鞭をとった。かたわら、独奏および室内楽活動を積極的に行う他、シュトゥットガルトバッハ国際アカデミー、ザルツブルグ国際夏期アカデミー、ロンドン王立音楽院など世界各地でマスタークラスを担当している。クラーヴェス等のレーベルから多数のCDをリリース。'02年ロットヴァイル文化財団芸術賞受賞。

ヴィンフリート・トル *Winfried Toll*（合唱指揮／ドイツ）

ミュンスターおよびフライブルク音楽大学で哲学と神学を学び、その後、作曲、音楽理論、音楽教育、声楽、指揮法を学ぶ。これまでに多くの作曲コンクールで受賞している。また合唱団、放送、音楽祭などで指揮者、作曲家として活躍している。フランクフルト音楽・演劇芸術大学教授。

リチャード・メイン *Richard Mayne*（ウィンドアンサンブル指揮／米国）

アリゾナ州立大学にてトロンボーンを専攻。音楽教育の学士と修士の学位を取得、オハイオ州立大学にて博士号を取得し同大学バンドの指揮者も務めた。その後、アリゾナ州にて高校教員として勤務し、その間、アリゾナ・バンド＆オーケストラ協会の会長を務めた他、テンペ・シンフォニー・オーケストラのトロンボーン奏者としても活躍した。現在は米国コロラド州にあるノーザンコロラド大学音楽学部の教授、シンフォニックバンド、マーチングバンドのディレクターを務めている。アメリカン・バンドマスターズ・アソシエーション（ABA）会員、ナショナル・バンド・アソシエーション（NBA）副会長。指揮者としての多忙な活動の他、米国各地やカナダなどに於いて、審査員、クリニシャンとしても活躍している。

平成24年度　武蔵野音楽大学・武蔵野音楽大学附属高等学校 オープンキャンパス・学校説明会のお知らせ

武蔵野音楽大学・附属高等学校に進学を希望している高校生、中学生、小学生とその指導者、保護者の方々を対象としたオープンキャンパス・学校説明会を下記のとおり開催します。ぜひご参加ください。

■日時：11月23日㈷ 10:00～16:00
■会場：武蔵野音楽大学　入間キャンパス　■申込締切：11月6日㈫

【説明会の内容】●ガイダンス（大学・高等学校別に行います）　●ミニ・コンサート
●受験相談（希望者のみ）　●ワンポイント・レッスン（希望者のみ）
●参加無料（簡単な昼食を用意します）

【お申込み・お問合せ】武蔵野音楽学園広報企画室
〒176-8521 東京都練馬区羽沢1-13-1　TEL.03-3992-1125　FAX.03-3991-7599
※学園ホームページ　http://www.musashino-music.ac.jp/
　モバイルサイトhttp://musaon.jp/ からも、お申し込みができます。

●表紙の顔

イリヤ・イーティン教授

イリヤ・イーティン教授は、2011年4月より武蔵野音楽大学に客員教授として着任しました。

モスクワ音楽院にてL.ナウモフに師事。在学中の'90年、ロシアのラフマニノフ・コンクールで第2位入賞を皮切りに、ウィリアム・カペル国際ピアノコンクール第2位、ロベール・カサドシュ国際ピアノコンクール第1位、'96年リーズ国際ピアノコンクールにおいて優勝するなど多数のコンクール入賞歴があります。

ピアニストとして世界各地でリサイタルを行う他、クリーヴランド管弦楽団、サンクトペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団等と協演、さらにS.ラトル、N.ヤルヴィ、V.シナイスキー、M.プレトニョフなど著名な指揮者と共演するなど、活発な演奏活動を繰り広げています。また教育活動においては、ニューヨーク市立大学、プリンストンのゴランスキー・インスティテュートにて教鞭をとり、ジュリアード音楽院にも度々招かれています。

現在、武蔵野音楽大学客員教授。

【今後の音楽活動】

●公開レッスン
（主催：日本ピアノ教育連盟・関東甲信越支部）
2012年10月8日㈪
武蔵野音楽大学モーツァルトホール

●リサイタル
2012年
10月27日㈯ 中国北京
11月29日㈭ 武蔵野音楽大学
江古田キャンパス
ベートーヴェンホール
2013年
1月19日㈯ 銀座 王子ホール
2月18日㈪ Ithaca College School of Music Ford Hall New York

武蔵野音楽大学・附属高等学校　平成24年度冬期講習会のお知らせ

講習会名	実施期間	申込受付期間	会場
音楽大学受験講習会	平成24年12月23日㈰～26日㈬	平成24年11月12日㈪～12月12日㈬	武蔵野音楽大学 江古田キャンパス
高校音楽科受験講習会	平成24年12月24日㈪～26日㈬		

要項請求：武蔵野音楽学園広報企画室、またはホームページ、モバイルサイトにてお申し込みください。（要項、郵送料とも無料）
お問合せ・お申込み：武蔵野音楽学園広報企画室 TEL.03-3992-1125　学園ホームページ http://www.musashino-music.ac.jp/　モバイルサイト http://musaon.jp/

武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金　ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、寄附金に対する税額控除制度の恩典が与えられたことに鑑み、江古田新キャンパス建設基金、福井直秋記念奨学基金並びに演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々よりご寄附をいただきました。ここにご芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。　学校法人　武蔵野音楽学園

※ご芳名（五十音順）は、平成24年6月30日までにご寄附をいただいた方々です。それ以降の方々は、次号に掲載させていただきます。また勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきました。何とぞご了承ください。

【同窓生】青木 嵩様　秋山紀夫様　浅野田鶴代様　石井純子様　伊藤郁子様　犬木瑛子様　井上美智子様　猪瀬奈緒子様　岩田千嘉子様　上原正子様　梅田百合子様　鮒澤俊雄様　大久保優美子様　太田展子様　太田優子様　荻野陽子様　川澄朋子様　木地谷智子様　高 尚美様　後閑幸子様　後藤貞子様　酒井香代子様　阪本厚子様　塩田京子様　島﨑裕子様　下道ヨシ子様　杉森純子様　鈴木美弥子様　舘岡真澄様　田中直子様　田村秀子様　柘植知子様　對馬英里様　道家素子様　中 美知子様　永田伸子様　中田由紀子様　中村 誠様　長柄弘道様　成田嘉惠様　波多野美摩様　馬場めぐみ様　尾藤尚美様　藤本勝子様　古井紀子様　許 伯恵様　細田章子様　本田晶美様　前田美香様　真壁玲子様　松浦清子様　参木京子様　嶺石辰子様　宮城崇美子様　宮本暢子様　山中源子様　山本文子様　山本光世様　吉村いつ子様　昭和53年入学同期会様　【在学生・同ご父母】秋津博美様　石川善清様　市村行孝様　井口由美子様　上田公一様　上野文博様　宇﨑理生様　薄井良吉様　江村裕司様　遠藤文男様　大久保栄一様　太田晃史様　大吉哲夫様　小川廣明様　奥秋幸仁様　刑部光太郎様　小田俊文様　小幡 賢様　大日方豊次様　笠原 力様　川野博之様　木原信吾様　呉 兆礼様　小池正昭様　小林正行様　迫口眞美様　澤村憲照様　杉野憲宏様　高須 稔様　高田智江様　高野光雄様　棚瀬裕文様　谷岡実様　富樫虎雄様　永井秀三様　長澤健治様　中村雅夫様　西村 栞様　乗田昌広様　林 幹人様　坂内玲子様　彦坂悠喜様　古家貴雄様　本間敬二様　宮谷厚志様　村井清俊様　山形英記様　山﨑一雄様　山﨑邦男様　山本 直様　横田孝之様　吉田貞夫様　吉田靜邦様　吉村敦子様　若林雅昭様　渡邊浩三様　【役員・教職員・一般・他】相原安夫様　阿久津三智子様　Ian Cameron McMicking様　池田 温様　石川 篤様　石丸雍二様　磯崎友孝様　上薗 明様　浦本裕子様　大久保 薫様　大滝雄志様　加島良和様　加藤高徳様　加藤真弓様　岸部香織様　清野美佐緒様　久保田彰子様　古池 好様　髙坂朋聖様　コッホ幸子様　後藤基裕様　後藤れい子様　小林五郎様　小林秀夫様　佐伯真弥子様　酒井真理様　佐藤 愛様　佐野悦郎様　澤本恒夫様　嶋田英里様　清水吉六様　末吉孝司様　鈴木義治様　平良栄一様　耕 修二様　田口宗明様　田中 悠様　谷 友博様　千葉家門様　綱川 惠様　寺本まり子様　富樫 肇様　富樫英夫様　戸田史郎様　野村邦武様　林 孝治様　原田知子様　日髙正枝様　福井直敬様　藤井隆史様　丸山忠璋様　水野雅子様　水野ゆみ様　三村隆文様　宮﨑幸次様　村上直行様　森田恭子様　山口道子様　山越正秀様　横地千鶴子様　横山修二様　若木暁子様　和田礼子様　渡辺定夫様

（他に匿名を希望される方44名）

栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）

（順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの）

●第３回　アントニオ・サリエリ国際コンペティション（イタリア）
ピアノ部門　第１位入賞、総合グランプリ（A.サリエリプライズ）受賞
阿久澤　政行（平成20年大学卒ピアノ専攻　本大学院修士課程修了）

●第７回　モーツァルト国際ピアノコンペティション（イタリア）　第２位入賞
阿久澤　政行（平成20年大学卒ピアノ専攻　本大学院修士課程修了）

●第14回　エウテルペ国際音楽コンクール（イタリア）　ピアノ部門　第２位入賞　長田　千佳（平成16年大学卒ピアノ専攻）

●第６回　プレミオエウテルペ国際ピアノコンクール（イタリア）　ファイナリストディプロマ授与
長田　千佳（平成16年大学卒ピアノ専攻）

●ボナフィーニ―ロンコーニ国際声楽コンクール（イタリア）　第３位入賞　西田　真以（平成19年大学卒声楽専攻　本高校卒）

●第48回　日伊声楽コンコルソ　入選
田村　佳子（平成10年大学卒声楽専攻　本高校卒）　月野　進（平成15年大学卒声楽専攻　本大学院修士課程修了）
眞塩　直（平成19年大学卒声楽専攻　本大学院修士課程修了）

●第27回　練馬区新人演奏会出演者選考オーディション　木管楽器部門　最優秀賞受賞　與那嶺　万里（平成24年大学卒オーボエ専攻）、優秀賞受賞　葩島　亮（平成24年大学卒ファゴット専攻　本別科在学）、弦楽器部門　優秀賞受賞　溝邊　奈菜（平成24年大学卒ヴァイオリン専攻）、●第８回　ルーマニア国際音楽コンクール　アンサンブル部門　第2位入賞（1位なし）　三浦　こと美（大学2年次在学クラリネット専攻）、打楽器部門　第2位入賞　佐藤　智基（平成24年大学卒打楽器専攻　本大学院修士課程１年次在学）、奨励賞受賞　鈴木　詩織（大学２年次在学マリンバ専攻　本高校卒）、●第６回　夢科音楽コンクール in 東京　室内楽部門　第3位入賞（1位なし）　原　悠一（平成23年大学卒チェロ専攻）、●2012アジア国際音楽コンクール　社会人ピアノ部門　優秀賞受賞　依田　真理（平成２年大学卒ピアノ専攻）、●第４回　さくら音楽コンクール　ピアノ部門一般A1　優秀賞受賞　桑原　由加里（平成17年大学卒ピアノ専攻　本高校卒　本大学院修士課程修了）、●第57回　西日本国際音楽コンクール　審査員奨励賞受賞　前島　あい（平成22年大学卒ピアノ専攻　本大学院修士課程修了）、●第19回　ペトロフピアノコンクール　大学・一般部門　審査員特別賞受賞　桑原　由加里（平成17年大学卒ピアノ専攻　本高校卒　本大学院修士課程修了）、●第17回　ベストプレイヤーズコンクール　入選　園生　彩（平成22年大学卒ピアノ専攻）、●コンセール・ヴィヴァン第30回　新人オーディション　合格　桑原　由加里（平成17年大学卒　ピアノ専攻　本高校卒　本大学院修士課程修了）、●第14回　日本ジュニア管打楽器コンクール　マリンバ部門　中学生コース　入選　横地　ちひろ（附属江古田音楽教室在室　桐蔭学園中学校３年生）、●第29回　“アジア国際音楽コンサート”オーディション　審査員特別賞受賞（マリンバ）　横地　ちひろ（附属江古田音楽教室在室　桐蔭学園高等学校１年生）、●第22回　グレンツェンピアノコンクール　予選　小学3･4年Ａコース　優秀賞受賞　志賀　愛実（附属入間音楽教室在室　小鹿野町立小鹿野小学校４年生）、●第20回　ヤングアーチストピアノコンクール　ピアノ独奏部門Ａグループ　入賞　早﨑　すずき（附属江古田音楽教室在室　練馬区立大泉東小学校２年生）

平成24年度10月～12月公開講座・演奏会のお知らせ

武蔵野音楽大学室内合唱団演奏会　10月 5日(金) 18:30 ベートーヴェンホール(江古田)　¥1,000〈全席自由〉
指揮＝ヴィンフリート・トル　合唱指導＝栗山文昭　独唱＝本松三和(Sop.)、曽我雄一(Ten.)、上田誠司(Bar.)
児童合唱＝武蔵野音楽大学附属音楽教室生徒　曲目＝オルフ:世俗賛歌≪カルミナ・ブラーナ≫(2台ピアノと打楽器伴奏による)

インゴ・ゴリツキー　オーボエ公開セミナー　10月17日(水) 18:30 モーツァルトホール(江古田)　¥1,000〈全席自由〉

パルナソス多摩女声合唱団　第15回記念演奏会　10月19日(金) 18:30 シューベルトホール(多摩)　¥1,000〈全席自由〉
指揮＝片山みゆき　共演＝武蔵野音楽大学室内管弦楽団、指揮＝クルト・グントナー
曲目＝グレゴリオ聖歌:Ave Maria/Kyrie No.8、F.メンデルスゾーン:Laudate Pueri
「近代日本名歌抄」より(信長貴富編曲)ゴンドラの唄／影を慕いて／カチューシャの唄
F.J.ハイドン:交響曲 第102番 変ロ長調 Hob. I:102、W.A.モーツァルト:アヴェ・ヴェルム・コルプス K.618　他
※詳しい内容は、武蔵野音楽大学パルナソス多摩(TEL:042-389-0711)までお問い合わせください。

インゴ・ゴリツキー　オーボエ・リサイタル　11月 1日(木) 18:30 ベートーヴェンホール(江古田)　¥1,000〈全席自由〉
共演＝青山聖樹(Ob.)、岡崎耕治(Fg.)、ツォルト・ティバイ(Cb.)、岡崎悦子(Cem./Pf.)

アクセル・バウニ　マスタークラス ～現・近代の歌曲の解釈～　11月 2日(金) 18:30 モーツァルトホール(江古田)　¥1,000〈全席自由〉

武蔵野音楽大学シンフォニック ウィンド オーケストラ演奏会
指揮＝前田 淳　11月 9日(金) 18:30 バッハザール(入間)　¥1,000〈全席自由〉
曲目＝J.S.バッハ:トッカータとフーガ 二短調 BWV565、シャブリエ:狂詩曲「スペイン」、川辺 真:神々の棲む山、スミス:独立賛歌による変奏曲　他

ニュー・ストリーム・コンサート18　～ヴィルトゥオーソ学科演奏会2～
11月12日(月) 19:00 トッパンホール　¥1,500〈全席自由〉

市民コンサート　武蔵野音楽大学管弦楽団(入間)演奏会(主催:入間市立中央公民館)
指揮＝カールマン・ベルケシュ　11月18日(日) 14:30 入間市市民会館　無料〈全席自由・要入場整理券〉
ヴァイオリン独奏＝矢沢まどか(大学3年・本学学生オーディション合格者)
曲目＝W.A.モーツァルト:交響曲 第34番 ハ長調 K.338、ヴァイオリン協奏曲 第5番 イ長調 K.219
スメタナ:連作交響詩≪わが祖国≫より「モルダウ」、リスト:ハンガリー狂詩曲 第2番

東京芸術劇場＆ミューザ川崎シンフォニーホール共同企画
第3回　音楽大学オーケストラ・フェスティバル(主催:音楽大学オーケストラ・フェスティバル実行委員会)
指揮＝北原幸男　11月24日(土) 15:00 東京芸術劇場 コンサートホール　¥1,000〈全席指定〉
曲目＝ショスタコーヴィチ:交響曲 第5番 二短調 Op.47　※同日は昭和音楽大学、洗足学園音楽大学も出演します。

武蔵野音楽大学管弦楽団合唱団演奏会　11月28日(水) 18:30 バッハザール(入間)　¥1,500〈指 定 席〉
指揮＝山下一史　合唱指揮＝栗山文昭　11月30日(金) 19:00 東京オペラシティ コンサートホール　¥1,500〈全席指定〉
独唱＝立野至美(Sop.)、小畑朱実(M-Sop.)、水口 聡(Ten.)、豊島雄一(Bas.)
曲目＝ヴェルディ:レクイエム

イリヤ・イーティン　ピアノ・リサイタル　11月29日(木) 18:30 ベートーヴェンホール(江古田)　¥1,000〈全席自由〉
曲目＝ショパン:前奏曲 嬰ハ短調、24の前奏曲、ラヴェル:ソナティナ、夜のガスパール、ラ・ヴァルス

武蔵野音楽大学室内管弦楽団演奏会　12月 7日(金) 18:30 ベートーヴェンホール(江古田)　¥1,000〈全席自由〉
指揮＝クルト・グントナー　12月14日(金) 18:30 響の森桶川市民ホール　料金未定

武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル演奏会　12月18日(火) 18:30 東京オペラシティ コンサートホール　¥1,500〈全席指定〉
指揮＝リチャード・メイン

お問合せ　●武蔵野音楽大学江古田キャンパス演奏部　TEL.03-3992-1120　●武蔵野音楽大学入間キャンパス演奏部　TEL.04-2932-3108
※講師の病気、その他やむを得ない事情により、出演者・曲目等を変更する場合もありますので、あらかじめご了承ください。
※チケットは武蔵野音楽大学ホームページ http://www.musashino-music.ac.jp/ でも予約ができます。

平成25年度入学試験要項請求について

武蔵野音楽大学の各入学試験要項は、江古田キャンパスで取り扱っています。
郵送をご希望の方(平成25年度受験対象者)には、無料でお送りいたします。本学ホームページ、モバイルサイトの「資料請求フォーム」からご請求ください。お電話でのお申し込みは、氏名、住所、電話番号、および附属高校、大学1年次、大学3年次編・転入、大学院、別科の別をお知らせください。(要項、郵送料とも無料)
なお、冬期受験講習会を受講の方には講習期間中に配付します。

【お問合せ・請求先】武蔵野音楽学園広報企画室
〒176-8521　東京都練馬区羽沢1-13-1　TEL.03-3992-1125
ホームページ http://www.musashino-music.ac.jp/
モバイルサイト http://musaon.jp/

編集後記

本を読む、身体を鍛える、歌を歌う、何をしても演劇のためになるという加藤健一さん。また本学の先輩・山下晶子さんは「あらゆるものに好奇心を持つべき」だと、ビルグラム女史は「他の芸術の表現方法を知ることも大切」だとおっしゃいます。演劇も、音楽も、専門のスキルを高めることはもちろん、他の分野にも目を向けて知識を深め、人間としての幅を広げることが大事なようです(編)。

ヌヌート

2010年　パプアニューギニア　全長56cm

ヌヌートは、パプアニューギニアの北東に位置するニューアイルランド島の中部北岸と、その沖に浮かぶタバール諸島にのみ存在した楽器で、刳り抜いた木片を樹液で濡らした手で擦り発音する。このように擦ることで鳴らされる楽器は「摩擦楽器」と呼ばれ、濡らした指や木の棒を用いたり、楽器同士を擦り合わせるなどの方法で音を出すが、その種類は多くはない。

ヌヌートは、村の有力者の追悼の儀式である「マラガン」でのみ使用され、長さ約30cmから60cmの大小のものを奏者が足に挟み、両手で上部を擦り演奏する。本体の彫刻は鳥や動物を表し、発する音はその鳴き声であるといわれる。ニューアイルランド島では、20世紀初頭よりキリスト教宣教師による布教が始まり、その結果、土着宗教の儀式は年々衰退の一途を辿った。マラガンは今も伝承されているが、内容は質素なものになり、華やかな仮面や楽器類の使用は姿を消してしまった。現在、ヌヌートは現地でも博物館でしか見ることができない。

2010年、浜松市楽器博物館は、この失われてしまった楽器の復元制作を企画し、本学博物館に共同制作の提案があった。現地で伝統文化保存の活動を続けているノア氏の協力のもと、当時の楽器とその音を再現させようというものである。数ヵ月に及ぶ現地での制作の後、わが国に届いた楽器は、具象化された鳥の彫刻まで忠実に復元された。マラガンの儀式は数百人の人々により、朝から夕方まで行われ、その間ヌヌートが鳴らされ続けたという。復元された楽器の響きからは、亡き人を偲びその魂の安泰を祈った当時の人々の想いを聴くことが出来る。

（武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵）

江古田キャンパス楽器博物館休館のお知らせ

「江古田キャンパス楽器博物館」は、リニューアル・オープンに向けて、現在休館中です。なお、「入間キャンパス楽器博物館」及び「パルナソス多摩楽器展示室」は通常通り開館しています。休館中は、ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解いただきますよう、お願い申し上げます。

目 次

ずっと遊びつづけていく覚悟 …… 1
加藤健一

卒業生インタビュー …… 5
武蔵野時代があるから、今の私がある　山下晶子

海外音楽事情 …… 7
リヒターの一言でチェンバロ奏者に　ヘトヴィヒ・ビルグラム

音楽の万華鏡 …… 9
ドイツのマティス：イーゼンハイムの祭壇画　寺本まり子

MUSASHINO NEWS …… 10
- 九州で、東京で、ウィンドアンサンブル演奏会
- 第17回 インターナショナル・サマースクール・イン・トウキョウ開催
- 熟練の音色を堪能した公開講座シリーズ
- 着任外国人教授紹介
- 平成24年度　武蔵野音楽大学・武蔵野音楽大学附属高等学校 オープンキャンパス・学校説明会のお知らせ
- 武蔵野音楽大学・附属高等学校　平成24年度冬期講習会のお知らせ
- 武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金　ご寄附をいただいた方々
- 栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）
- 平成24年度10月～12月公開講座・演奏会のお知らせ
- 平成25年度入学試験要項請求について

武蔵野音楽大学大学院
博士前期課程・博士後期課程
武蔵野音楽大学
武蔵野音楽大学別科
武蔵野音楽大学附属高等学校
武蔵野音楽大学第一幼稚園
武蔵野音楽大学第二幼稚園
武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園
附属音楽教室 江古田・入間・多摩

発　行
学校法人 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス　●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1 TEL.03-3992-1121（代表）
入間キャンパス　●〒358-8521 埼玉県入間市中神728 TEL.04-2932-2111（代表）
パルナソス多摩　●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1 TEL.042-389-0711（代表）
http://www.musashino-music.ac.jp/

2012年10月1日発行　通巻第103号

モバイルサイト
http://musaon.jp/